

藤村「処女地」に執筆した女性作家達（三）

—— 細川武子、辻村乙未、若山喜志子 ——

永 淵 朋 枝

序

島崎藤村が創刊した婦人雑誌「処女地」（大11「一九二二」・4
大12「一九二三」・1）に執筆した女性作家（文学事典等に項
目のある一名）は、どのような人達だったのか。本稿では、細
川武子、辻村乙未、若山喜志子を取り上げる。（一）略歴、主な
著書、項目のある事典（二）評伝、年譜の有無や研究状況（三）
同時代批評等（四）女性作家達が「処女地」に発表した作品、「処
女地」や藤村についての言及を調査し、主に著書から彼女達にとつ
ての「処女地」の意味を明らかにする。最後に「一名の作家全体
についてまとめたい。氏名は、一般の事典の掲載名を用い、別
の主な筆名を（ ）内に記す。年齢は、満年齢で表記する。

一、細川武子

（一）明治二五「一八九二」年六月一六日～昭和三二「一九五六」

年九月二八日。東京市赤坂区生まれ。父は統計学者。三人姉妹の
次女。明治四五年、東京府女子師範学校卒業後、大正一四年まで
東京府の小学校に勤めた。この間、大正四年、三島商業学校教諭
細川宣哉と結婚。大正一二年九月から一五年五月には、結婚前の
女子に修身、国語、英語、裁縫、手芸、活花、お茶等を教え、寄
宿生も置いた、たかね女塾を主事として経営した。大正一五年六
月、創立に参加した調布高等女学校副校長兼調布幼稚園長となり、
浄財を集めて「精進の鐘」を鑄造、最期まで二六年間毎日暁と夜
に鐘を撞いた。⁽²⁾昭和一七年三月立華高等女学校創立、校長をつと
め、二八年幼稚園を併置して園長になる。上野毛、氷川、鶴ヶ丘
幼稚園等の創設にも尽力し、多くの子女を自宅に引き取って細か
い世話をした。⁽³⁾六四歳で、手術後急逝。三年後、幼児教育、女子
教育の功績を追慕して顕彰碑が建てられた。

武子は小学校訓導時代、沼田笠峰の指導を受けた。「少女世界」
（博文館 明39・9～昭6・10）の投稿者が主任（明40～大10）

の笠峰を指導者として結成（明43）した少女読書会は、季刊誌「たかね」（大2・10～大13・8）を出すようになる。その頃から武子は会に参加し、幹事の一人として、年二回の懇談会の世話や「たかね」編集等に活躍した。「たかね」は、店頭には置かない会員組織によって二千部近く発行された季刊誌で、ここから、北川千代、森田たま、吉屋信子、尾崎翠、武子等が世に出たのである。⁽⁴⁾大正六年大阪朝日新聞懸賞お伽噺に武子の「白鳩の願ひ」が入选し（三等）、「大阪朝日新聞」大6・6・18朝、その後「良友」「少女世界」「幼年倶楽部」「少年倶楽部」「少女倶楽部」等の雑誌に作品が掲載された。特に、童心主義の雑誌の一つ「良友」（コードモ社 大5・1～昭2頃 大8～9は浜田広助が編集）に、武子は「大正八年末からほぼ毎号執筆している」。

大正一五年にはラジオで童話を放送する放送童話を始めた。「読売新聞」「ラヂオ版」に「かたみの腕輪」（大15・2・9朝）、「鳩の使ひ」（大15・5・1朝）が載り、後者に「童話放送は之が二度目」「子供の世界をもつと純粋なものにしてゆきたい」とある。大正一四年三月東京放送局がラジオ放送を開始、一五年八月に日本放送協会が成立したことを考えると、ごく初期の放送である。武子は、日本童話協会（機関誌「童話研究」大11・7創刊）に所属しているが、初期の放送童話には同会の口演童話家達が出演した。武子は「童話研究」（昭6・7）に「金のお馬」を執筆し、同会編『新幼児童話選集』（蘆谷蘆村七回忌の出版 日本保育教材 昭27・12）にも「仔熊のスキー」を寄せている。昭和初期の

「読売新聞」（「朝日新聞」には記事がやや少ない）には、ラジオ番組（21時台に終了）の放送内容が掲載されている。武子の放送は年数回ではあるが、「けふのコードモの時間」欄等に多くは洋装顔写真入り「調布女学校教頭・調布幼稚園長」として紹介され、内容が詳しく紹介されている。結末を示さず「羊さん達はどんなうれしいことに逢ふのでせう。放送までに考へてくらんなさい」（「羊さんのお正月」、「読売新聞」昭6・1・6朝）というものもある。「少年少女の夕童話大会 童話は御存じの先生方で」（同昭6・5・9朝）には、「童話ををぢさんとをばさん 久留島武彦、細川武子、榎葉勇の三童話家⁽⁵⁾」として三人の写真が入り、武子の「大海を越えて」の内容が紹介されている。武子はまた、東京放送童話研究会にも所属。放送される童話は「十一月六日の第二次放送童話研究会で実演研究されたもの」（「落ちたお日様」、同昭4・11・23朝）等とある。「安倍季雄 榎葉勇、等二十数名の東京放送童話研究会」が「三回続き位で毎月一回子供の『名作物語』」として発表することにした時には、第一回の「竹取物語 第一話」を担当した（「子供の時間の名作物語」同 昭9・1・19朝）。武子は晩年までNHKこどもの時間、文化放送等で放送を行い、講演旅行も行っている。

放送童話で活躍する一方、童話文学の創作者が主体の童話作家協会（大15・2創立）にも所属。入会（昭2・12）以降、同会『日本童話選集』（丸善）に毎輯作品を掲載した。

主な著作に、童話集、未婚の女性を対象とした少女小説がある。

童話集として、放送童話を集めた『細川武子童話集』（末尾に「童話放送 目次」。童話春秋社 昭14・12）、「この御本を読んで下さる皆さんが、お母さんの喜んで下さるやうなよいお子さんになれる事を祈りながら」と「まへがき」にある『お母さん』（同昭15・7）、「私はおばあさまっ子でした」（「まへがき」と書く武子が祖母の昔語りを集めた『おばあさん』（同昭16・6）、出来が良くても中学に進学できない兄の友だちや幼稚園に上がない子を見て、誰とでも仲よくしようと決心する園児の話等を集めた『お友だち』（同昭16・12）等がある。

『女学生記』（有光社 昭16・3。昭22・8に草美社から新版）結婚前の女性達を描いた『むすめ達』（有光社 昭16・11）等もある。『女学生記』「序にかへて」には、女学生の姿をフアーブル『昆虫記』のように映そつとしたとある。広告に石坂洋次郎が「娘達の生態を刺す所なく描き尽して居る。いかにも明るい健全な読物である」と書いている（『読売新聞』昭16・5・11朝）。『女学生記』は、同年八月、東京発声映画製作所製作、東宝映画配給、村田武雄監督、谷間小百合、矢口陽子、高峰秀子、山田五十鈴ら出演の映画にもなった。戦後の著作には「世のいわゆる少女小説」ではなく自分の「生活の中から拾いだした事実」、「実在の人物」であるチーマー姉妹等の活躍を描いた（「まへがき」という『乙女の国』（「少女クラブ」に昭21・1～12連載。大日本雄弁会講談社 昭23・2）、日本在来の年中行事を描いた『四季物語』（童話春秋社 昭25・5。『乙女の四季』同昭23の増補）等がある。

これらの他に、『夫と妻』（主婦之友社 昭17・9）、『巨いなる母』（錦城出版社 昭18・2）等もある。『巨いなる母』は戦時色の濃いものであるが、末尾「お互の信頼」は貧苦の中『日本財政総覧』編纂を続けた父細川雄二郎と母を描いたものである。戦後には、『日本名作物語堤中納言物語』（同和春秋社 昭27・10）等がある。また、大正末期から「家庭」「家の光」「婦人倶楽部」「婦人画報」「読売新聞」等に、子供の育て方、女学生の結婚問題等について執筆した。

武子は、「お話の上手な人」であり、「子供は愛すべきもの、同時に尊敬すべきものである」「元来子供は良きものである」と考えていたらしい（閑屋五十二「細川先生と私」、細川武子先生顕彰会編『細川武子先生顕彰碑建立記念誌 調布学園 昭35・1』）。武子の童心主義は、「赤い鳥」（大7・7創刊）等をはじめとした当時の時代思潮であると共に、幼稚園長を長くつとめた体験からくる信念だったのである。武子は形式的な良妻賢母主義ではなく、互いのからだと修業の為に別居生活を送る（「この一年間」、「たかね」大8・4）等、柔軟な考え方を持っていたと考えられる。作品は、良識的、類型的、理想主義的なものが多いが、それは武子が、主に幼稚園児、女学生という比較的恵まれた階層の子供達を教育する立場にあったことと切り離せないだろう。戦中の作品には、戦場で負傷した先生が、自己の出世を思う小さい個人から天皇陛下の赤子（せき）としての大きい人間になった（「分教場」『お母さん』）等と書かれている。武子の作品には、時代の枠の中で教育

者として、読者が「心身すこやかに成長」することへの祈りがある（『乙女の国』『まえがき』）。その祈りがあるにもかかわらず、むしろその祈り故に、時代の思想に取り込まれている。普遍的な別のものであつて良いはずの個人よりも大きい存在が、天皇・国家と直結する思想に取り込まれる、という戦時下の教育や文学の問題は改めて考察すべきである。女学生の実態を映した武子の『女学生記』は戦中版を重ね（一月足らずで二版と新版に書かれている）、戦後新版が出た。武子の本領は、長年の教師としての経験に裏打ちされた、女学生への愛情を込めた細かい観察をもとにした小説、さらに園児にお話する経験を生かした童話にあつたといえよう。

『日本婦徳の鑑』、『日本近代文学大事典』、『日本女性人名辞典』、『日本児童文学大事典』、『日本人名大辞典』等に項目が立てられている。

（二） 評伝・研究は特になく、『日本児童文学大事典』の記載がやや詳しい程度である。「たかね」掲載作品や「編輯雑記」、笠峰七回忌に出版された回想集『たかね』（編集人兼発行者は武子少女世界旧誌友会 昭17・2）、『日本童話選集 第二輯』（昭2・12）掲載の自筆「新会員著作年表」、武子没後募金によって顕彰碑を建立、その残金によって発刊された『細川武子先生顕彰碑建立記念誌』（前出）、当時の新聞雑誌等から足跡を辿る他ない状態である。なお、『日本近代文学大事典』、『日本女性人名辞典』、『日本人名大辞典』等には、島崎藤村、浜田広助に師事したと書かれ

ている。藤村については「処女地」執筆、広助については「良友」執筆を指すのかもしいが、詳しいことはわからない。

（三） 武子は「この時期の創作童話の最高水準を記録」したとされる（滑川道夫「『日本童話選集』の史的意義」復刻版『日本童話選集 解説編』大空社 昭58・6）童話作家協会編『日本童話選集』に、「鳩のお医者様」（第二輯 昭2・12）、「うごくお家」（第三輯 昭3・12）、「おもちゃの犬」（第四輯 昭4・12）、「二匹の仔熊」（第五輯 昭5・12）、「大海を越えて」（第六輯 昭6・11）。新聞に掲載された同題の放送童話とは結末が異なる）と、入会以降毎輯作品を載せた。当時の童話文学の世界で確かな位置を占めていたと考えられる。これらは、「弱者としての犬の運命」「母としての犬の性愛」は出ているが、擬人化する場合「犬なら犬の特殊の性情、智能、感覚等を考慮」しなければ「作品を希薄にする」（小野政方「童話二十八作家評」（二）『日本童話選集』第四輯を見て、「読売新聞」昭5・1・29朝）、「少しも珍しい話ではないが、筆の巧みさで読まされる」（蘆谷蘆村「童話三十三篇」短評『日本童話選集』を読んで、同 昭6・12・26朝）等と評された。

（四） 処女地 1号 大11・4 細川武子「姪のもとへ」（手紙）—— 女学校に入学した姪からきた手紙への返事として、姪の実の母親である自分の姉は「自分の心から、幸をつくつてゐる人」であつたが産後病没し、姪の今の母親が実子と隔てぬ愛で育ててくれたこと、姪が実母とそっくりであることを綴る。

処女地 3号 大11・6 細川武子「二度目の春」(小説)

——小夜ちゃんは隣の兄さんと大の仲良しだったが、女学校に入学してからは「歩きつきから、お辞儀の仕方まで、つひ三ヶ月前とは、まるで変った、女学生風をみせ」、お兄さんにも以前のように自然に甘えられない。『女学生記』に収録。

後者は二〇年後、武子の代表作となる『女学生記』の冒頭に収められた。「処女地」当時小学校訓導をしていた武子は、小学校卒業間もない女学生にも関心が深かったのであろう。けれども、「編輯雑録」(「たかね」大10・7)には、「私は自分の職務との関係から」この先童話や童謡を専門に努力したい、「決して、今更何かほかのものを書いて見たいなどといふ野心はおこすまい、又書くまいと決心」した、とある。その半年後に「子供のよみ物」ではないものを、「処女地」に寄せたことになる。この後の長年の女学校教師生活の意味は大きい、この時期に「処女地」に女学生を観察した作品を執筆したことが、武子が『女学生記』等の作品群をつくるきっかけとなったということも考えられるのである。

二、辻村乙未「正宗乙未」

(一) 明治二八「一八九五」年一月一日～昭和四九「一九七四」年七月三〇日。岡山県和気郡伊里村穂浪(現備前市)の旧家の生まれ。旧姓正宗。七男三女の八番目(兄一人夭折)の次女。兄に正宗白鳥、万葉集等の国文学者正宗敦夫、洋画家正宗得三郎

らがいる。白鳥は藤村と互いに敬愛し合った小説家、劇作家、評論家。得三郎は、パリで藤村と交友、リモオジユの民家で共に生活した、「新生」の牧野のモデル。「処女地」(8号)には「仏蘭西田舎家の台所 正宗得三郎氏写生」を寄せている。乙未は、女子英学塾(現、津田塾大学)に学んだ。大正六年、地理学者辻村太郎と結婚、八年長男出席。辻村は、結婚当時東京帝国大学理科大学地質学科大学院で地形学を専攻、昭和一九年同大学教授となる。

事典類には、「処女地」掲載の作品のみが記されているが、乙未は「処女地」以前に「文章世界」に短歌を投稿し(大2・7)、「処女地」以降も、「女性」「文芸日本」「不同調」「婦人公論」「女人芸術」等に、小説、コント、翻訳等を発表していることを確認できた(筆名は「辻村乙未」よりも「正宗乙未」の方が多い)。特に、関東大震災後の文壇で勢力のあった、日本モダニズムの風潮を反映した高級文芸雑誌、プラトン社の「女性」(大11・5・昭3・5)が「閨秀作家キヤメラ訪問(オフセット十二頁)」(大15・10)を掲げた時には、柳原燐子、中條百合子、鷹野つぎ、佐々木房子、三宅やす子、宇野千代、北川千代、網野菊子、丹野てい子、池田小菊、吉屋信子と共に二人中の一人として「正宗乙未」の写真が一頁掲載されている。「女性」には、郷里の漁村での出来事や女子英学塾寄宿舎時代の出来事(「花見」大13・3、「西洋菓子」同・11、「発見」大14・8「墓」同・11、「糸蘭の花」昭2・7)、媒酌をめぐる機知に富んだ短篇小説(「C夫人の媒酌」昭2・

1、「ホワイト・エプロン」昭2・2）等を載せている。大正末期には作家として相当認められていたと考えられる。

「不同調」にも主に紀行文等の短篇を寄せ、白鳥を論じて「私は彼を人生に対して光明を認めない、否、認め様とさへしない者の如く云ふ人のあるのは如何かと思ひます。彼こそ其の幽かな光をさへ、真剣に求め様として居た随一の人ではないかと云ふ気がしてなりませぬ」「求め様とする欲望の余りのげしきは、反つて反対の現象を生む事にならないでせうか——少くとも多少異つた性格の所有者に於ては——」と書いた（三十九氏「はがき評論正宗白鳥氏」大15・4）。一方白鳥は、村の「人に顔を見られるのが氣味が悪いから」家の門から出ようとしない、身体の弱い、それでいて除け者の四男の兄辰男の力になろうとする、東京の学校を目指して勉強中の勝代（「入江のほとり」大4・4）、「炬燵に当つて小説ばかり読んである身体も弱い女が夢見たやうなことを考へて東京へ来たつていゝことのあらう筈はない、年齢から云つても普通の結婚期を過ぎかゝつてゐるのに、この上四年も五年も学校通ひで過ごすのが何で仕合せなことがあらう」「どうしたら人間は幸福な生活が立てられるのやら、本当はおれにだつてわからないんだからね、弟妹が何をしようとおれは黙つて見てゐるんだね」というKのもとに上京してくる妹（「春が来たのに」大4・5）等、故郷を背景とした作品に乙未をモデルとした妹の姿を描いている。

『日本近代文学大事典』『島崎藤村事典』『日本人名大辞典』等

に項目が立てられている。

(二) 評伝はなく、研究も僅かである。川端俊英「辻村乙未『無花果の村』を読む——『処女地』同人の小説」(『同朋大学論叢』平14・6)は、白鳥が「入江のほとり」に「十六も年の差があつた乙未の少女時代の一面を、親愛の情を込めて描いている」ことを指摘し、「処女地」についての藤村の談話「これまで私のところへよくやつて来てゐた河口玲子、浦野蕉子、鷹野つぎ、辻村乙未の四人」に相談して仲間が集まつたのです、乙未は「正宗君兄弟に共通な觀察の鋭さ、深さがあつてまだそれほど作品を発表してゐませんが将来有望な作家の一人です」(『処女地』にあつまる若き婦人、「サンデー毎日」大11・7・16。『藤村全集 別巻』筑摩書房 昭46・5所収)等を紹介している。さらに「無花果の村」について「部落に生きる女人像の典型」を書き分けて「差別の実相を活写し」、「藤村が評したとおりの〈觀察の鋭さ、深さ〉が感じ取れると論じている。川端氏には「無花果の村」の「作品解題」(『部落問題研究』平15・7)、「小説『無花果の村』——鋭い現実觀察」(『島崎藤村の人間觀』新日本出版社 平18・3)もある。

(三) 『文芸日本』(大14・8)の特輯コント号に掲載された「月光」は、「事件の面白さと軽いウィットを持つてゐる」が「ありふれたテーマしか見出せない」(小原晃「コントと銘打つ二十八篇」、『国民新聞』大14・8・14)、「中々こまかいもの。いゝコントだと思ふ」(尾崎一雄「八月小説短評」、『新潮』大14・9・1)

等と評された。生田花世は、「無花果の村」を「特殊部落の産婆の惨死に、その要領を得た觀察を」立派に見出し得た（『処女地』について）、「女性」（昭2・2）女流ユーモア小説特集掲載の「ホワイト・エプロン」を「むしろ諷刺小説といつてよかつた」（『女流のユーモア作品』）と評した（『近代日本婦人文芸女流作家群像』行人社 昭4・11）。宮本百合子は、「女人芸術」の作家として「翻訳家」「正宗乙未」をあげている（宮本百合子「合はせ鏡」「婦人と文学」実業之日本社 昭22・10）。乙未は「処女地」以降もコントを書く作家や、翻訳家として注目されていたらしい。

なお、「処女地」掲載「漁村にて」（1号）は、「現代婦人の手紙」⁽¹⁰⁾（河井醉茗編 アルス 大13・4）に収録された。

（四）処女地 1号 大11・4 辻村乙未「消息」二つ（漁村にて、早春の頃）（手紙）——結核の為に漁村に転地療養に来た二〇歳の私の手紙と、混み合つた電車の中で手の甲に未知の「触覚の快感」等を感じた事件を書いた手紙。

処女地 1号 大11・4 辻村乙未「病床にて」⁽¹¹⁾（手帳）

処女地 2号 大11・5 辻村乙未「春愁」（小説）——信心深かつた祖母の腰巾着だつた頃の回想に、今年四つの自分の子供の姿が交錯する。

処女地 2号 大11・5 辻村乙未「帰途」（手帳）

処女地 3号 大11・6 辻村乙未「靴」（小説）——底に二つ穴にあいた靴を八〇銭で修繕に出したのに、靴屋はすっかり裏皮を変えたので二円八〇銭出さねば渡さないと云う。書生が二

円でおさめてくるが、自分の「小さい優越慾」、さびれた店の不和が思われて「正當に私」おと家をしながら、足がすくんで店に入れない。

処女地 4号 大11・7 辻村乙未「憂惱」（小説）——「好子は順調に、何の苦も知らずに、大人に成り結婚した。丁度或庭に、思ふまゝ成長した植物が、其周囲の土を、根元に着けたまゝ、そつと持ち上げられて、或遠いもう一つの庭に、大切に下ろされ」「昔のまゝの自由な生活を、妨げるものは無い、と云ふ風な、極く自然な、自由な、結婚生活であつた。」「今迄の生涯」があまりに「平穩過ぎた」ということが「ひどい嵐の前兆では」という不安を感じていた折、夫が指導旅行の旅先で急病との電報が来て、岐阜まで駆けつける道中の不安を描く。

処女地 4号 大11・7 辻村乙未「誘惑多き日本婦人の服装」（手帳）

処女地 4号 大11・7 辻村乙未「偶感」（手帳）
処女地 5号 大11・8 辻村乙未「眼を開く頃」（小説）

——師範出の新任の木下先生は、「就任後一ヶ月になる迄、村内の主なる家々に挨拶に廻ら無かつた」こと等が議員達から問題にされるが、生徒からしたわれ、高等科一年の繁代には気になる存在であつた。ある朝繁代は「友達とでなく遊びに来て呉れませんか」という木下先生の手紙を見るが、それは「空想の時の半分も彼の女を楽しめなかつた。」「村の娘達の悲惨な恋の成行き等」が「頭に来て気の弱い、空想的な、しかし理智のはつきりした」繁

代は一言も返事をしなかった。女学校に進学した繁代は、精神病になった木下先生の死を妹から知らされる。

処女地 6号 大11・9 辻村乙未「秋草 晩秋の高原の花」(小品)

処女地 6号 大11・9 辻村乙未「鷗外先生」(手帳)——
訃報に接して、母からの手紙だけは保存するという人間としての先生の面影がまず頭に浮かんだ。

処女地 7号 大11・10 辻村乙未「森鷗外先生」(手帳)
処女地 7号 大11・10 辻村乙未「寸感」(手帳)——「勉強をさまたげるだけはよして呉れ」と本を手放さない「学者を時に呪はしく思ふ」。「私と子供は、行きどころのない惨な鳥の様に、狭い家の隅に声をひそめなければならぬ」。「私の様な我儘者は、内助の功」というものが「びつたり胸に来ない」。「百姓の様に共に働き、共に茶をすゝり、夜を平凡にかたりあかす様な生活が、どれ程味の深いものであるかわからない気がする。そして本当の家庭生活は、さう云ふものでなければならぬと思ふ」。

処女地 8号 大11・11 辻村乙未「無花果の村」(小説)——「三歳の豊野を視点人物として被差別部落を描く。リョーマチスで働けなくなった母は、家出した兄息子のことを気に病み、巫女を呼ぶが心身を一層悪くする。お巻婆さんは息子が肺病で寝たきりなので七〇を過ぎても部落の外の村に出て行商をしていたが、村の子供から容赦のない侮蔑を受け大男に突かれて胸を強打し、息子の床の手前の「板の間に席が敷いてある」上の蒲団に

横たえられ、村の医者に診てもらえないまま死ぬ。豊野の姉もまた「一日でもえゝ広々とした世に出て見たい」と家出し、豊野は、お巻婆さんの孫が言った、ここから逃げて素性が知れてしまいいは乞食の様になつて戻つてくる」という言葉を胸に浮かべる。

処女地 9号 大11・12 辻村乙未「晩秋雑記」(隨筆)——
母は「大勢の子供を持つて、着物を着せる事と、食事の世話とだけでさへ、手一杯」なので、「お徳婆の昔がたりや、御伽噺は、私達を喜ばした」。

処女地 9号 大11・12 辻村乙未「日記の一節」(手帳)
処女地 10号 大12・1 辻村乙未「野分のあと」(小説)——「三〇歳で夫に先立たれたお松は一〇年余り何とか一人で庄太を育ててきたが、寂寥と貧の中、嵐で台所の屋根もはがれ、嵐の翌朝倒れた桐の木を盗む」「罪を見つけると興奮する堪三」は地主に田地を取り上げるように言い張り、お松は首をつる。

処女地 10号 大12・1 辻村乙未「この一年間」——「昨年の十一月中旬先生のお宅に上つた時」処女地「刊行に付いてのお話を初めてうかがつた。そしてそれに加はつて見ないかと云ふ事であつた」。「私も御一緒にさせて頂きます」と答えたものの引き返して断るうかとためられ、「恐れと不安に満されて居た」。「私は月を重めるにつれてほんのわづか乍ら自分の道が開けて行く様な気がした」。「真面目に私が歩かうとした此一年間は私の生涯中で最も記憶さるべき年であつた」。

乙未は、「家庭の社会的意義——山田わか著、論文集」(4号)「書架」欄、「寺田屋騒動——三島章道、小説」(7号)「新刊書」欄)も執筆している。

「処女地」発行を報じた「女ばかり集めて 藤村氏の雑誌」(「東京朝日新聞」大10・12・29朝)は、藤村の談話と共に、乙未を訪問した記事を載せ「藤村さんは全集出版の印税をこの事業に費つて行き度いとのことで私達は其有難い思召に反かめやう努力する積りです」という「辻村女史の意気込み」を載せている(『「処女地」の同人辻村夫人」のキャプションで写真入り)。「処女地」成立の経緯や藤村の期待からみても、乙未は「処女地」の主要な一員である。けれども初期の作品は、主に身辺に題材を取った、ごく短いものであった。「消息二つ」(漁村にて、早春の頃)(五頁)、「春愁」(六頁)、「靴」(九頁)、「憂悩」(一六頁)、「眼を開く頃」(一四頁)、「無花果の村」(二七頁)、「野分のもと」(一三頁)と、号が進むにつれて小説の頁数は着実に伸びている。「憂悩」(4号)は、不安で一杯の妻の心情からのみ描かれて少々冗漫であるが、「眼を開く頃」(5号)になると因習の残る村の様子等も描き込まれ、「無花果の村」(8号)、「野分のもと」(10号)になると、社会の底辺の女性を主人公とした、深みのある展開を持つ作品となっている。「無花果の村」「野分のもと」は、「処女地」以降の作品を見ても、やはり乙未の代表作といえる。

差別を扱った作品として、「処女地」には他に、「家柄の悪い家から来た」という理由で嫁を帰した後、三件の親戚が没落してい

く様を五四頁にわたって描いた長坂きくじ「ある女の手紙」(7号)がある。乙未の「無花果の村」(8号)が次号であることを見れば、『破戒』(明³⁹・3)を著した藤村による指導ばかりでなく、「処女地」の仲間同士で刺激し合い、研鑽を積んだ、ということも考えられる。「この一年間」(10号)から推せば、「処女地」が発行されなければ、乙未は作家にならなかつたという可能性もある。乙未は「処女地」で大きく成長した作家なのである。

三、若山喜志子

(一)明治二二(一八八八)年五月二八日(昭和四三・一九六八)年八月一九日。長野県東筑摩郡吉田村(現塩尻市)生まれ。旧姓太田。本名喜志。代々村の庄屋を勤めた太田家の六男六女の中の四女(三男一女は夭折)。歌人潮みどりは妹。高等小学校の時、窪田空穂、太田水穂らと親しかつた小松秀一が担任になり、歌の手ほどきを受けた。松本に設立された県立高等女学校に進学を奨められるが、父の反対で断念し、病弱の母を助けて家事を手伝いながら、文学、絵画に親しんだ。農閑期の補習科である広丘農工補習学校を四〇年卒業。四〇年には「女子文壇」に新体詩等を発表し始め、「四十二年の詩欄」は山田邦子のもとを受けて殆君のひとり舞台なりき(「吾は泣きつゝ」評 明42・12)と横瀬夜雨に評されるようになった。四一年から水穂が選者の「信濃毎日新聞」歌壇にも発表、相聞歌で注目された。岩淵要を中心とする歌壇投稿者の白夜会にも参加。四二年、広丘農工補習学校に裁縫教師と

して勤務。校長は島木赤彦であり、「アララギ」に勧誘されるが、返事を送った。四四年、文学を志して上京、太田水穂宅に寄寓した後、新宿の下宿で遊女の着物を縫って自活するが、年末に帰郷。

四五年、歌人として知られた若山牧水の求婚に応じ、もとの下宿で五月同棲。牧水は父危篤の報で七月に宮崎に帰郷したまま上京できず、翌大正二年四月喜志子は実家で長男旅人出産、直前に入籍。六月、牧水とともに東京小石川に住む。八月には牧水主宰の「創作」が復刊され、喜志子も歌を発表するが、三年二月「創作」休刊。四年腸結核のため神奈川県三浦郡に転地、長女出産、第一歌集『無花果』出版。翌年小石川に転居、翌六年、「創作」復刊、牧水との合著『白梅集』出版。翌年次女出産。夫牧水は旅に明け暮れ、経済的にも苦しい生活が続いた。九年には、牧水の念願であった田園生活に入るため静岡県沼津に転居、翌年次男出産。多数の歌壇選歌を牧水が担当したことにより生活はやや安定したが、一四年沼津に落成した新居の費用がかさんだ。さらに牧水は「創作」の他に、宿望であった、散文詩、短歌、俳句、童謡等の総合雑誌「詩歌時代」を一五年五月に創刊し、反響を呼んだものの多額の負債を生じた。これらの資金繰りの為に、晩年の数年間、牧水は北海道から九州、朝鮮半島まで揮毫旅行に行き、喜志子も同伴した。酒と揮毫旅行は牧水の健康を書し、昭和三年九月、牧水四三歳で病没。

喜志子は「創作」主宰を継承、選歌も担当し、「婦人之友」「主婦之友」の選歌欄選者も受け継いだ。翌年から創作社内が分裂、

プロレタリア短歌を取り入れようとした派を牧水の伝統を守ろうとする側が除名、除名組が喜志子を攻撃する等の騒動が起こり、苦悩した。五年には、牧水の死によって冷たい現実を知り「更生」した（『巻末に』）と書く喜志子が、作歌を始めてからの歌を整理した第三歌集『筑摩野』を出版し、女流歌人としてゆるぎない地位を築いた。一二年沼津から東京へ移住。一六年年次女を交通事故で亡くす。一八年年次男学徒動員で出征。「創作」は一九年二月で休刊。二〇年、疎開先の静岡でも焼け出され、長野に疎開。九月次男帰還。二一年六月、社友名簿を探し集めて「創作」復刊。牧水の前年に病没した妹潮みどりの夫で牧水門下の長谷川銀作が編集兼発行者、喜志子は選者となる。二七年一〇月以降は、主宰（発行者）喜志子、編集者銀作。二八年から郷里に近い崖の湯の山七温泉に滞在することが多くなった。二八年「週刊産経」短歌欄選者、山村湖四郎創刊「朝霧」の顧問となる。NHKのラジオ放送や講演等をつとめ、創作社、朝霧社の会合や各地の牧水歌碑除幕式等に出席。喜志子の歌碑は、二三年の郷里村井駅前をはじめとして長野に多数、神奈川、静岡等にも建てられたが、喜志子は生涯、家を捨て村を捨てた不義理の思いを持ち続けた。八〇歳の八月、「創作」翌月号の選歌作歌を終えた後に臥床、老衰の為死去。

生前刊行の歌集として、『無花果』（潮音社 大4・12）、牧水との合著『白梅集』（抒情詩社 大6・8）、『筑摩野』（装幀は中川一政 改造社 昭5・10）、『芽ぶき柳』（『現代短歌全集第六巻』

装幀は旅人 長谷川書房 昭26・6）、『眺望』（『創作社叢書第35篇』やしま書房 昭36・6）の五歌集がある。そして自選の選集として『現代短歌 第三巻』に『埴鈴集』（河出書房 昭15・9）、『現代短歌叢書 第二巻』に『若山喜志子篇』（弘文堂書房 昭15・12）が入っている。没後の若山旅人編『若山喜志子全歌集』（短歌新聞社 昭56・7）は、右の七つの歌集と『眺望以後』『補遺』、阿部富士子・大悟法稔子「年譜」、大悟法進「若山喜志子の歌集」、『初句索引』等から成る。

『無花果』の水穂「序」には、喜志子女史の「感動」は制御を伴い、「深く根強く思ひつめた揚句の破裂」の「力」を持つとあり、牧水「巻尾」には、彼女は歌を「好きに乘じて自分勝手に作」っているのであり「頑固も強い」、「度し難きものとして私が傍観者の地位に立」ったことは矢張り良かった、「歌だけでも彼女の自由な、満足なものを作らせ度い」とある。「にこやかに酒煮ることが女らしきつとめかわれにさびしき夕ぐれ」等を収める。牧水没後の『筑摩野』には、「形にそふ影とし念じうつそ身を我はや君にささげ来にしを」等を収める。『現代短歌叢書』は、「みづからを鞭うち追ひつめ此処までは来たが、さてこれからだ荒んでくれるな」等、正調でない歌も収め、「あとがき」に「いつも私は『いき耻を曝して来てゐる』とある。『芽ぶき柳』には敗戦後の『凍みとほる夜半の目ざめにきくものか命を洗ふ川の瀬の音』、晩年の『眺望』には、孫を詠んだ『襦袢を替へてやりながら心痛し紛れなきこの女体の具備り』、絶詠五首に『出あひ頭に投げたる石

が殺戮を犯して山棟蛇血をあびのたうつ」等がある。「苛酷な現実」に直面しつつ、歌を詠むことに依つて勇敢に自己を把持してゆく（『若山喜志子集』「巻末」に『現代短歌全集 第十八巻』改造社 昭6・3）とした喜志子は、感性の鋭い錬磨によって、終生激しさを持ち続けた歌人だったのであろう。

歌論「女子短歌入門」（『短歌講座 第二巻』改造社 昭6・11）、「大伴坂上郎女」（『万葉集講座 第一巻』春陽堂 昭8・2）等もある。また喜志子は、「創作」はもとより、「女子文壇」「ピাত্রリス」「金の船」「文章世界」「新潮」「婦人画報」「婦人公論」「朝日新聞」等に、短歌ばかりでなく隨筆や短篇等を多数発表している。

さらに喜志子は、喜志子編『若山牧水歌集』（岩波文庫 昭11・10）、喜志子編牧水秀歌撰『虹は彼方に』（東京美術 昭42・5）の選歌をし、喜志子・大悟法利雄編『牧水全集』全一二巻（改造社 昭4・8～5・8）、喜志子利雄編『若山牧水歌集』（新潮文庫 昭27・2）、喜志子利雄編『若山牧水全集』全一三巻（雄鶏社 昭33・4～34・6）、喜志子銀作編『若山牧水選集』全五巻（春秋社 昭36・11～37・6）等の編集に携わった。牧水の没後、生涯をかけて牧水を知ること、知らせることにつとめたのである。

『日本近代文学大事典』『現代女性文学辞典』『日本女性人名辞典』『日本現代文学大事典』『青鞥』人物事典『詩歌人名事典』『日本女性文学大事典』『日本女性史大辞典』等に項目が立てられている。

(二) 阿部富士子・大悟法稔子『赤い入日』(短歌新聞社 昭55・8)は喜志子の終焉記、聞き書き、年譜、歌論等を収める。塩尻短歌記念館の事務局をしておられた樋口昌訓『若山喜志子私論』全五巻(第一部:短歌新聞社 昭63・5、第二部:同 平元・5、第三・四部:日本ハイコム 平5・12、第五部:同 平8・12。年譜あり)は、信州歌壇『女子文壇』の女流等にも目を配り、丹念に収集した資料を掲げて、喜志子の歌と生涯を論じた力作。喜志子が戦中「平和よ来れ」(『短歌新聞』昭12・11・30)を書いたことも紹介している(第五部)。喜志子の歌や喜志子のこととは、大岡信『折々のうた』(新折々のうた)(岩波新書 昭55・3)平4・9、平6・10(平19・10)、岡井隆『岡井隆の短歌塾 鑑賞編七』(六法出版社 平2・11)、もろさわようこ『信濃のおんな下』(未来社 昭44・8)、道浦母都子『百年の恋』(小学館 平15・6)、小林朋子『朝未き頃』(信濃毎日新聞社 平18・7)等に取り上げられている。雑誌では、「朝霧」「創作」の生誕百年記念号(昭63・12、平1・2)等の他、「秘めたる情熱・若山喜志子」(『短歌』平4・4)、「若山喜志子の歌」(『短歌現代』平13・8)等の特集が組まれ、研究もかなりある。なお、「若山喜志子展」(平18・9~10)が沼津牧水記念館で行われた。

(三) 加藤武雄は『文章世界』所載「若山喜志子夫人」の「古家の煤戸のほかはつゆしらす老にけらしなくとき母は」「家のため祖先のためとわが兄はかなしかるらん土を耕す」を「本当にいゝ歌だと思ふ」(『烈日の下に』(七)、『時事新報』大8・8・15)

と評した(前者は「古家の煤戸のほかは見もしらす老い朽ちにけり」ととき母は」として『筑摩野』に収録)。正富汪洋・茅野雅子・喜志子編『現代婦人詩歌選集』(婦女界社 大10・5)の汪洋「明治大正婦人詩歌小史」には「夫人の歌には、誇張が殆んど無い、しみじみとした所がある」「平民的な現代人的な歌」とある。今井邦子「若山喜志子を語る」(『短歌研究』昭8・1)は、信濃女性「自己を信ずる事厚く強情に自我を前進させてゆく野人の力」と、「真率純情」と指摘する。神原克重「若山喜志子夫人の歌」(『短歌』昭29・12)には、「元来牧水風に平明であつた夫人の歌」は変化を見せ「きびしく孤高な世界を追求せんとしている」、私は「この行き方に多くの希望と尊敬とをもつ」とある。

「到り着く路まで(自叙伝の五)」(『婦人画報』大9・9)、「放浪詩人牧水と共に」(『婦人公論』昭15・1)、「熱情の家 牧水と共に」(同 昭15・2)等の自伝の執筆も、牧水の妻であるばかりでなく喜志子が歌人として認められていたことを示す。「第一線をゆく女性」(『婦人公論』昭14・1)の歌人五人にも邦子らと共に入っている。没年の昭和四三年には「短歌研究」「短歌」「創作」、翌年に「朝霧」が追悼特集を組んだ。

なお、喜志子の歌は、前出の『現代短歌』『現代短歌叢書』『現代短歌全集』(改造社)『現代婦人詩歌選集』の他に、『現代日本文学全集』³⁸(改造社 昭4・9)、「女流十人歌集」(中河与一編 富士書店 昭17・5)、『現代短歌全集 第五巻』(創元文庫 昭27・11)、『現代短歌大系 第九巻』(河出書房 昭28・12)、『

『昭和文学全集41』（角川書店 昭29・7）、『現代短歌全集 第三卷』（『無花果』収録 筑摩書房 昭56・8）、『編年体 大正文学全集』の大正四、五、七、八、九、一四年（ゆまに書房 平12・11～平15・3）等に、収録されている。

（四）処女地 1号 大11・4 若山喜志子「懶き春」（歌）——「二首」「年」ころをなれて親しき香貫野に今日うちつれて摘草をする」等、沼津での日常生活を詠む歌が多い。冒頭の「しづ心しはしはやどれ行く水のよどむを見ればなげきとはなる」のみ、結句を「なげきとぞなる」として『筑摩野』に収録。

喜志子が「処女地」に発表した作品はこれのみである。ただし、「処女地」2号「おとつれ」欄に「沼津より」として「絹さん」宛てに、1号を「すみからすみまで、いつまでもく見て居ました。どうかく苦しい何ものにもうちかつてたくかひ、「処女地」の名をまげないやうにしたいと思ひます。私も何かしらかきます」と書いた。3号の同欄には「絹さん——まことにすみません。お約束しておきながら、今日まで待つていたといっておきながら」「心はたとへやうなく焦りますけれどもどうしても思ひがまとまりません」とある。3号「書架」欄には「青杉——土田耕平著、歌集」の批評と共に「私は以前から、同じアララギの同人のうちでもこの人の歌は注意して見てゐた方ですから親しみも多いのだらうと思ひます」と書いている。沼津で、幼い四児を育てていた喜志子が「処女地」に発表し続けることは困難だったらしい。

喜志子は、「女子文壇」の仲間であつた鷹野つぎから「処女地」

に勧誘され、「どうかして私如き者もお仲間に入れていただきたいとかげながら願つて居たところでした。それにおなつかしくお慕い申している島崎先生のお教導のもとときくのが、一番力づく有難いことでございます」（大11・1・20）と返事を書いた（東栄蔵『鷹野つぎ』銀河書房 昭58・7）。喜志子は「女子文壇」では詩人として活躍していた。「兄にねだつて買つてもらつた島崎藤村先生の『藤村詩集』は、私の最も愛読した詩集であつたと書いている（『放浪詩人牧水と共に』前出）。喜志子の師水穂、赤彦、空穂、四賀光子、邦子、喜志子ら、信州が輩出した歌人にとつて、藤村は同郷の詩人であつた。歌人と詩人とは異なるようであるが、明治期、与謝野鉄幹、晶子、北原白秋、石川啄木らは、詩と短歌とを共に創作した。水穂や赤彦らも「文学界」に掲載された藤村詩に注目して新体詩を創作、水穂と赤彦の合著詩歌集『山上湖上』（金色社 明38・3）に、藤村の序「山上」を付した。処女詩歌集『まひる野』（鹿鳴社 明38・9）について空穂は「当時私は新体詩を重んじていて、短歌はそれ程には思つていなかった」と書いている（『歌集について思い出す事ども』窪田空穂全集 第一巻『角川書店 昭40・2』）。牧水の初期の「創作」（明43・3創刊）や「詩歌時代」は短歌専門雑誌ではなく、牧水は訪れた青年に「万葉集もよいですが、先づ手近な藤村詩集や現代の短歌からお初めなさい」と言つていたらしい（山村湖四郎「牧水を知つた頃」、「朝霧」昭29・9）。藤村が歌壇に与えた影響は想像される以上に大きいのである。

結び

「処女地」に執筆した作家——名中、本稿で取り上げた若山喜志子、前稿（「藤村『処女地』に執筆した女性作家達（一）（二）」平20・3、平21・3）で取り上げた生田花世、加藤みどり、鷹野つぎ、若杉鳥子の五名は、それ以前に河井醉茗編集主任の「女子文壇」で活躍していた。それと同時に、複数の雑誌や会にも参加して切磋琢磨していた。喜志子は、太田水穂選の「信濃毎日新聞」歌壇で知られ、歌壇投稿者の白夜会にも入っていた。花世やみどりは醉茗「詩人」の社友として作品も発表、つぎは浜松の文学同好会にも参加し、鳥子は若山牧水の「創作」等にも執筆していた。「女子文壇」の研究は進みつつあるが、女性達が「女子文壇」——誌にとどまらないで文学を求めていることを指摘しておきたい。さらに、本稿で取り上げた細川武子は、「少女世界」主任の沼田笠峰が指導した「たかね」で育った女流作家であった。「女子文壇」の他にも、女流作家を育てた指導者、雑誌はあったのである。「処女地」の作家達を辿っていくと、「女子文壇」↓「処女地」↓「女人芸術」という系譜がほの見えてくることも指摘しておきたい。雑誌研究は、様々な雑誌の連関においてもなされるべきであろう。

「処女地」の作家達に顕著なのは、上京組の多さである。——名のうち、東京生まれの武子、川島つゆ、島崎静子は別として、奈良女高師附属小学校訓導をつとめた池田小菊以外の七名が全員上京している。花世、みどり、澤ゆき（結婚によって帰郷）、つぎ、

鳥子、喜志子、乙未は、親を説得あるいは家出して、地方から上京した。上京の意味はどこにあったのか。喜志子は「生い立ちし家の暗さのいとはしく遺書^{かきぞと}もせし雪ふりつむ夜」と詠み、これらに「旧くかたくなる家に生れて、をとめをなげき」云々と詞書を書いた（「無花果」「筑摩野」）。母は二人もの子を生み病気がちで子供の世話と家事に追われていた、私は家を出て「独立の自活をしてみたい」と希望していた（「放浪詩人牧水と共に」前出）と書く喜志子は、母のような人生、上京しなければ自分もそんな人生から脱出した。「古家の煤戸のほかはつゆしらず老にけらないときき母は」を「いゝ歌だ」と誉める加藤武雄（前出）の郷愁とは、別次元の痛みが喜志子の歌にはある。女子英学塾（現、津田塾大学）入学の為に上京した正宗白鳥の妹、乙未も「両親は一年中営々と働く計りで、その小さい漁村から一歩も離れるどころか、村の内さへめつたに歩く事の無いと云ふ生活」（「西洋菓子」前出）と書いている。彼女達は、文学を志して上京したが、自活したくとも生活できずに、結婚によって家庭に取り込まれ、それでも筆を手放さなかった。書くことによって「自分の道が開けて行く様な気がした」（乙未）、「歌を詠むことに依つて勇敢に自己を把持してゆかう」（喜志子）と書いた作家達にとって、文学とは（私が私になること）であり（私が私をつくっていくこと）だったのである。

もちろん、上京の意味も、「処女地」の意味も、個々人によって違いがある。「処女地」が生んだ作家と言われるつぎ、「処女地」

で成長し代表作「無花果の村」を発表した乙未、「処女地」をきっかけとして藤村と結婚した静子は、「処女地」で育った人といえよう。プロレタリア作家となる鳥子は『帰郷』、武子は代表作『女学生記』に収められる作品を「処女地」に発表し、文学生活における重要なきっかけを掴んだ。小菊は婦人運動家、つゆは俳文学者になるというその後の生涯を予測させる文章を発表した。郷里の酒造家で詩作を続けたゆき、歌人として大成する喜志子は、時期等の都合で「処女地」に発表した作品は少ないが、「処女地」への熱い思いを手紙で寄せた。加藤みどりも「処女地」へは没後の作品掲載である。「処女地」を「女流文芸雑誌の主流」に位置づけた花世にとって「処女地」は、「女人芸術」の人脈を作った雑誌でもあった。それはまた、「処女地」に執筆した花世、つゆ、ゆき、つぎ、乙未、鳥子、喜志子の七名が「女人芸術」に執筆することにまつたのである。

「処女地」は一〇号で終刊し、発行期間は確かに短い。しかし作家達の足跡をみれば、「処女地」は、文学的成長の場となり、その後の文学生活の重要な契機となり、後続の雑誌の人脈をつくっており、決して小さくはない意義を持ったといえるのである。

〔*注〕

- (1) 『昭和大典記念日本婦徳の鑑』（東京婦人新聞社編・刊 昭6・12）『日本女性人名資料事典 第1巻』日本図書センター 平18・3所収、『日本近代文学大事典』（日本近

- 代文学館 小田切進編 講談社 昭52・11・53・3）、『島崎藤村事典 新訂版』（伊東一夫編 明治書院 昭57・4）、『現代女性文学辞典』（村松定孝・渡辺澄子編 東京堂出版 平2・10）、『日本女性人名辞典』（芳賀登「ほか」監修 日本図書センター 平5・6）、『日本児童文学大事典』（大阪国際児童文学館編 大日本図書 平5・10）、『日本現代文学大事典』（三好行雄「ほか」編 明治書院 平6・6）、『青鞥』人物事典—10人の群像—（らいてう研究会編 大修館書店 平13・5）、『日本人名大辞典』（上田正昭「ほか」監修 講談社 平13・12）、『詩歌人名事典 新訂第2版』（日外アソシエーツ編 日外アソシエーツ 平14・7）、『日本女性文学大事典』（市古夏生・菅聡子編 日本図書センター 平18・1）、『日本女性史大辞典』（金子幸子「ほか」編 吉川弘文館 平20・1）等参照。
- (2) 調布高等女学校は現在、田園調布学園中等部・高等部となり、「精進の鐘」が朝礼で鳴る。調布幼稚園は存続、田園調布学園大学も設置されている。
- (3) 「子供の叱り方実話 失敗した実例」（家の光 昭5・5）には「現在十二人」預かっているとある。「娘二人を嫁がせて」（『婦人倶楽部』昭18・6）には、「私は肉親の我が子ならぬ子供を六人持ち育てました」とあり、後事を託されて育てた孤児四人兄弟のうち娘二人を「決戦下」に嫁がせた母親としての心情と実践が述べられている。

- (4) 少女読書会規約(「たかね」大6・1等)には、「本会は、一般少女の品性の向上をはかると同時に、読書趣味を普及させるのを主要な目的」とするとある。大正九年一月から「たかね婦人会」となった。大正一〇年、笠峰が頌栄高等女学校校長になってから雑誌方面と縁遠くなり、実際のな仕事を始めたいという会員の希望もあつて始まつたのが、たかね女塾である。(前出「たかね」所収の沼田ふく子「思ひ出のまゝに」等参照。同書は武子の「鐘」等を所収。)
- (5) 日本童話協会創立時、久留島武彦は顧問、榎葉勇は常任理事。武子には、六十の人数と五人の少女が日本と満州と仲良くする為に人形使節となつて満州に行った時に、そのお世話をして満州に行った時のお話(「読売新聞」昭8・7・15朝)というものもある。
- (6) 童話作家協会創立当時の幹事は、秋田雨雀、蘆谷蘆村、小川未明、浜田広介等。武子と同じ『日本童話選集 第二輯』で宇野千代、第四輯で村岡花子、北川千代が新会員になった。
- (7) 『クオレ』を連想させる童話集。『おばあさん』には、大木惇夫訳『クオレ』の広告がある。
- (8) 辻村太郎「渡欧日誌」(『黄葉集』古今書院 昭34・12)には、昭和六年の渡欧に乙未が同行したこと、長男辻村初来「油土の軍艦のことなど」(『辻村太郎先生を偲ぶ』昭59・4)には、珍しく親子三人で銀座の資生堂に行く時も父が
- 本を手放さなかつたこと等が書かれている。
- (9) 「無花果の村」については、故郷を描いた白鳥の「牛小屋の臭ひ」(『中央公論』大5・5)との関わりも考えられるだろう。被差別部落に関わる記述は「元日から毎日新平民の牛肉売りが入つて来た」程度であるが、「枯木のやうな身体で、他家の飲み水汲みや使ひ歩きをしてゐる」が年末から臥せつてゐる祖母と、身売りした音信不通の姉娘の帰りを待つ盲人の母と、働き手の菊代の三人は、大地主のかつての牛部屋に「二枚の筵^{むしろ}を敷いた板の間」に寝起きしている。モデルがいたらしいことが白鳥「電報」(『文芸雑誌』大5・4)からわかる。「無花果の村」が、郷里での見聞と観察を組み合わせて構想した作品であること、乙未が白鳥の作品にも学んだことがうかがえる。帰郷して「出入りの人間に一人として暗い影を帯び醜い姿を持つてゐないものはなかつた」(「電報」)と書く白鳥と、東京で空想した「風光明媚な村は、磯臭いきたならしい現実の姿を現はし、半裸体に近い女房連は無遠慮に車の周囲に集つて来た」(「糸蘭の花」前出)と描く乙未とは、同じ旧家に育つた血縁として感性が似ている。村の人々を、単なる蔑視や温情ではなく、醜いと感じつも目を逸らさず、客観的に観察して描く態度も共通している。
- (10) 喜志子「奈良に居る画家の方に」も収録。
- (11) 「手帳」は「わたしたちの手帳」欄記載のもの。

(12) 喜志子は「女子文壇」の後続誌「処女」の評論欄選者(大

2・9)大3・2。大2・11から「感想」欄に変更)になる。同誌に「女子文壇の批判者だつた人は前に若杉はま子、山田邦子あり、のちに長曾我部菊子がある。その後太田きし子の名が詩壇を圧して全誌を風靡したのは皆人の知る所、ついで四人が四人大家になつた」(XYZ「続既往十年間」大3・2)と書かれた。邦子以外の鳥子(若杉はま子)、花世(長曾我部菊子)、喜志子(太田きし子)は、「処女地」に執筆した。今井邦子(旧姓山田)と喜志子は、同郷で「女子文壇」時代から終生親しい交友があつた。

(13) 岩淵要との相聞歌。岩淵は後に、潮みどりと並ぶ「創作」の女流歌人であつた北町品子と結婚するが、歌人としての道を夫によつて断たれた品子と短歌を捨てた岩淵は、昭和二十九年離婚、岩淵は翌年死去、品子も翌々年病没した(樋口昌訓『若山喜志子私論 第三部 前出』)。

(14) 飯田祐子「愛読諸嬢の文学的欲望」(『日本文学』平10・

11)、金子幸代「小寺(尾島)菊子と『女子文壇』・『青鞥』」(『社会文学』平21・2)等。

【附記】『藤村』『処女地』に執筆した女性作家達(一)～(三)

の引用は原則として原本によるが、引用の際、旧字を新字に改め、ルビ・圈点を適宜省略した。なお歴史的事実や同時代評に関する部分の多くは、各作家の「(一)」にあげた

評伝や研究、『文藝時評大系 明治篇・大正篇・昭和篇1』(宗像和重 ほか)編 ゆまに書房 平17・11)平20・3)に負つものである。また資料の閲覧・複写について、国文学研究資料館、大阪国際児童文学館、日本近代文学館、沼津牧水記念館、各大学図書館等に、大変お世話になつた。篤く御礼申しあげたい。本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)による研究成果の一部である。